



# 確かな学力の向上をめざして【9月】

## ■校内研究へのQ-U活用について

中部地区のすべての小・中学校がQ-Uもしくはhyper-QU（以降「Q-U」と表す）を実施しており、その活用方法は様々です。第1回中部地区小・中学校研究主任等研修会では、校内研究や授業改善へQ-Uを活用する視点について研修を行いました。

### 授業改善への活用 ① 「学習集団の型」を活用する



日本の授業は学級のすべての児童生徒が参加する集団活動であるので、学級集団の状態が授業の内容に大きく影響する。学習は学級集団を単位として動くため、学級満足度尺度結果の型から基本的な対応への示唆が得られる。

→学級集団の型と具体的な対応は、研修資料「応研レポート No.8 (P.6)」を確認！

### 授業改善への活用 ② 「Q-Uと学力とのクロス集計表」を活用する



#### ① 一斉指導における教師側の「指導量」の目安を得る

例) A、B-1、B-2にいる児童生徒の人数の学級全体に占める割合に着目

「A+B-1+B-2」の値が、

- ・80～90% → スムーズな展開が可能（少ない指導量でよい）
- ・60%以下 → 一斉指導に手がかかる（十分な指導量が必要）

#### ② 指導量の目安から援助体制を検討できる

□一斉指導の指導量が小さい学級は、児童生徒の主体性を生かした授業の展開ができる。

□指導量の大きい学級では、T.T.や支援員の配当などを検討する必要がある。

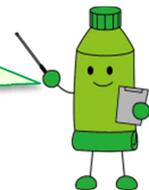
#### ③ 学年や学校による支援を必要とする学級・児童生徒の共通理解ができる

□共通の尺度となるため、複数の教師でチーム対応を行う際の認識も共有されやすい。

（標準学力検査の結果より）	一次支援	C-1	B-1	A
	二次支援	E-1	D	B-2
	三次支援	F	E-2	C-2
		三次支援	二次支援	一次支援
		生活支援レベル （「Q-U」の学級満足度尺度より）		

ポイントは「C-1」「D」にいる児童生徒

- 「C-1」の児童生徒は、学力はあるが要支援。盲点になっていることがある。
- 「D」の児童生徒は、目立たないが、大勢を動かす鍵になっている。



### 諸検査の活用を進めましょう！

各学校では様々な検査・調査が実施され、分析もされています。これらを授業づくりに活用することが大切です。



Q-Uを「授業づくり」に活用しましょう！

研修資料をご確認ください！